



これが現行の軟式ボールの主力商品である「新型ケンコーボールA号」。

軟式野球ボール

誰もが最初は
軟式から野球を始め。
ナガセケンコーの功績は大きいぞ！

テレビ、雑誌、新聞、ラジオ、小説、ネットなど各メディアで野球を文化として発信している人々を紹介する当コーナー。第6回は日本における野球の裾野を広げるのに多大な貢献を果たしている「軟式野球ボール」にスポットを当てた。軟式ボールの存在もまた、間違いなく野球文化の一端である――。

のみだったのでゲーム中によくボールが破裂することがあり、それを想定したルールがあったそうだ。

初代の軟式ボールは自転車のペダルにヒントを得たすべり止めの模様。表面にほどこされていた。その後、菊型ボールと呼ばれるデザインを経て、戦後ゴルフボールのようなディンプルのあるデザインが、大きなもののマイナーチェンジはあるものの半世紀ほど続いた。軟式ボールといえばこのディンプルのあるタイプを連想する人も、この雑誌の読者の皆さんには多いのではないだろうか。

06年からの現行モデルにはディンプルがない。縫い目を模したデザイン部分の高さをえさしかりしていれば、ディンプルがなくてもボールは

きちんとまっすぐ飛ぶという流体力学のアドバンスを考慮に入れた結果、ディンプルなしのデザインとなった。今話を伺った軟式ボールを製造しているナガセケンコー社は、昭和9年（1934年）に設立された。当時周囲の墨田区や足立区にはゴム加工業者が多く、ナガセケンコー社もその中の一つだった。最初はゴム長靴などを作っていたが、ほどなく軟式ボールの製造にとりかかり、特化していく。第2次世界大戦後もすぐにボールの製造を再開し、終戦直後の子どもたちの数少ない娯楽の一端を担った。

ナガセケンコー社の軟式ボールは、全日本軟式野球連盟の公認球に認定されている。また、中南米では11歳

以下の大会で同社の軟式ボールを使用しており、ゴムボールのことは「ケンコーボール」と呼ばれているそうだ。

軟式野球には 独特の戦術が存在する

少子化とスポーツの多様化は、軟式ボールの売り上げにも大きな影響を及ぼしている。40年前は男子小学生がはじめて触れるスポーツは野球であり、各家庭に軟式ボールが転がっているのが日常であったが、今では最初からサッカーやテニスなど野球以外のスポーツに親しむ子が増えているのが現状だ。また、公園で野球をするのを禁止しているのも子

子どもたちが安全に プレーできるために 開発された軟式ボール

日本に野球が伝わったのは、江戸幕府が崩壊し元号が明治になって程なくのことだ。いわゆるお雇い外国人のひとりであるアメリカ人が教えたそれは、硬式ボールを使うものであった。

その後野球は目覚ましい勢いで普及していったが、硬式ボールではケガをしやすいため、また広い場所を確保しないとできないこともあり、子どもたちが遊びにくいという一面もあった。そんな中、子どもたちでも気軽に野球を楽しめるようにと、軟らかいボールを作る動きが見られ



上/初代の「菊型」は複製版パッケージとして現在販売されている

どもの野球離れの一因となっている。最盛期には軟式ボールを製造するメーカーは200ぐらいあり、野球人気とともにさまざまな連盟が大会を催し隆盛を極めていたが、現在公認ボールを作っているメーカーは、5本の指で足りてしまうほどになってしまった。

軟式ボールは中空になっているので、打ったボールは最初つづれた形で飛んでいく。それが途中でまた球体に戻るのだが、そのため硬球よりも飛距離が伸びない。ホームランがなかなか出ず、点が入りにくい。それが軟式野球の長く続く延長戦の一

因となっている。昨年の全国高校軟式野球選手権大会で延長50回の死闘が繰り広げられたことは、みなさんの記憶に新しいだろう。

この軟式ボールの飛距離を伸ばすために、ボールがバットに当たったときにあまりボールがつぶれて変形しないように、ボールが当たる部分をあえて軟らかいウレタン素材で作ったバット（ミズノ・ビヨンドマックス）が開発・販売され、その従来のバットとは全く違う飛距離によって、驚くほどのヒット商品となった。軟式には、ヒットなしで1点を取るという得点パターンの定石がある。

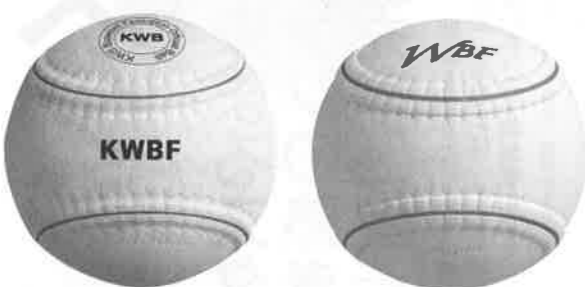
バウンドが高く上がる性質を利用して打者がボールを叩き、ボールが空中にいる間に三塁ランナーがホームインするという軟式ボールの特性を生かした独特の戦術だ。

ナガセケンコー社では、現在「KWBFボール」というボールを販売している。これが従来の軟式ボールと違う点は、バウンドを硬球並みに抑えているところだ。硬式と軟式の少年野球が交流をする際、軟式の子に硬式をやらせるのは無理があり、また硬式の子に軟式をやってもらうと、元から軟式をやっているチームの方が圧倒的に有利になってしまうことから、お互いが無理せずできる方法はないかということで開発されたボールだ。

現在東京墨田区の鐘ヶ淵駅から徒歩で数分のところにあるナガセケンコー本社の目と鼻の先には、開いている時間であれば無料で自由に見られる同社の軟式野球資料室がある。スカイツリーという現代を象徴するタワーを望む下町の一角で、古い写真や歴代軟式ボールを眺めて自分の子供時代に思いを馳せるのも一興だ。



上/歴代軟式ボール。2005年以降の現行からディンプル（表面の無数の穴）が消えた
右/モノクロ写真で分かりにくいですが、軟球の内側は黒いゴムと空洞になっている



左/KWBFボールは、軟式から硬式へと移行する中学生向けのボールとして最適だ



上/取材にご協力いただいたナガセケンコー株式会社・宮本憲一さん
下/東京・墨田区のナガセケンコー本社には軟式野球資料室が併設されており、一般の見学も可能だ

